

お母さんたちの悲鳴——駐在員の報告

ガザの封鎖が始まって10年。高い失業率と国際的な支援の減少で人々の生活はますます厳しくなっています。医療支援を受けている家族で、家計を守るお母さんたちに当会駐在員が話を聞きました。



ガザ住民はサッカー好き。停電はささやかな楽しみを奪う



スイカの季節。果物を買えない家庭が増えている

サファさん (28)——夫と4人の子ども。夫はタイル工場で働いていたが怪我で働けなくなり、今は国連からの支援で生活。

「電気が一日4時間しかないの、扇風機もなかなか使えません。私は義足なので、汗で皮膚がかゆくなってしまいます。電気代はアパート全体で割っており、私の家は月に300シェケル(1シェケルは約30円)も払っています。電気が来ると、まず子どもたちのためにテレビや扇風機をつけ、携帯電話などの充電をします。

ラマダン(断食月)もイード(断食月明けの祭日)もこれまでとは全く違ったものになっています。以前は夜遅くまでみんなで集まったり、子ども達にお菓子や新しい服を買ったりできたのが、今年はそれもできませんでした。交通費がかかるのでどこにも遊びに連れていけません。国連の学校の夏休みプログラムも、今年は財政難のため実施されないの、子ども達は家にいるしかありません。」

ファリヤールさん (47)——12人家族。夫は建築現場で働いていたが、作中に4階から落下して負傷し失業した。

「二人の息子が働いています。携帯電話の会社で働いている一人は週に200シェケルもらっていますが、結婚しているので家計が別です。もう一人はタクシー会社で働いているが、ただの従業員なので稼ぎは十分にありません。この息子は婚約したのに、結婚資金を貯められなくて結婚できず一年たってしまいました。

ファラフェル(豆で作るコロッケ)やフル(豆のディップ)はたんぱく質が多く含まれているので良いと聞きましたが、最後に食べたのはラマダンの時です。国連の食糧支援は、3ヶ月待たなければなりません。ラマダン中はお金がなくて食物が買えず大変でした。

電気があるときは、まずパンを焼きます。以前はかまどがありました。子どもが壊してしまい、それからは電気オーブンで焼くしかありません。国連の小麦粉支援があるので、パンは買うよりも自分で作った方が安いのです。でも国連の財

政難で支援が減っています。特に砂糖の支給は減る一方で、生活に大きく影響しています。」

イスマさん (32)——夫は公立学校教員。

「前回、夫が給料をもらったのは2ヶ月ぶりで1,200シェケルでした。10年前の半額です。経済状況はどんどん悪くなっていて、私たちの精神状態もひどくなっています。3歳の息子は小麦アレルギーで、グルテンフリーの粉は配給されません。お菓子ももらっても食べさせられないので、息子は泣いたり叫んだりします。

娘たちに「学校でいい成績をとったら、プレゼントをあげるよ」といって励ましているのですが、「嘘をつかないでほしい。プレゼントなんてもらえないじゃない」と言われてしまいました。娘たちも状況が厳しいことは理解してくれています。でも、まだ子どもです。こんな状況を我慢できるはずはありません。」

パレスチナでは、2006年の選挙にハマスが勝利し、翌年にはガザからライバルのファタハを追い出したことで、ガザのハマス政権とヨルダン川西岸のパレスチナ自治政府(PLO)が対立状態にあります。ハマスを認めないイスラエルは、それ以来ガザの封鎖を強め、人や物資の出入りが難しくいま10年がたっています。

内部対立はパレスチナの立場を弱めているだけでなく、特にガザの生活を苦しめています。パレスチナ自治政府は公務員の給与を削減しているだけでなく、燃料のガザ搬入を制限しているといわれます。一方ハマスは電気代や税金の徴収を強めているだけでなく、政治的立場の強化に封鎖を利用して、ガザの住民はイスラエル・パレスチナ自治政府・ハマス三者のいわば人質状態だという見方もあります。封鎖から10年、難民となって70年という節目にありながら、ガザの人たちの政治への関心が高まらないのも、生活苦だけでなくそうした状況に疲れきっているからといえそうです。